

特集論文

極小規模校における教室を超えて協働する学びの実践の成果と課題

Achievements and Problems of Collaborative Learning Practices over Classrooms in Small Schools

山田 真稔
YAMADA Masatoshi
(和歌山大学教職大学院)

井上 富裕
INOUE Tomihiro
(かつらぎ町立梁瀬小学校)

藤田 賀子
FUJITA Yoshiko
(かつらぎ町立笠田小学校)

受理日 令和5年11月15日

抄録：本研究は極小規模の小学校における課題を解決するための取組に関する研究である。梁瀬小学校は教室に同年年の児童がいないため「協働する学び」の実践が難しいことが課題であり、中学校進学時にいきなり多人数の中に入る不安は、児童だけでなく、学校、保護者、地域の共通認識であった。これらの課題を解決するため、校内、校外を問わず交流できる場の設定を積極的に行った。6年生は、同じ中学校区の3小学校でオンラインや対面の交流を行い、中学校進学に向け前向きな意識を持つことができた。1・2年生複式学級では、古座川町立明神小学校とオンラインで交流し互いの地域の特徴や違いを学んだ。また、高野町立花坂小学校と定期的な朝のオンラインスピーチや対面交流も行い、協働する学びが実践できた。課題としては、相手校との連絡調整の難しさがあげられる。各校のねらいも包括した交流を計画、実施していくカリキュラムマネジメントが大切である。

キーワード：協働する学び、小規模校、オンライン交流、カリキュラムマネジメント

1. はじめに

著者ら3名が令和4年度に勤務していたかつらぎ町立梁瀬小学校は、1年生1名、2年生1名、6年生1名、特別支援学級（知的）1名の全校4名、1・2年生複式学級、6年生1名のみ単式学級、1名のみ特別支援学級の3クラスであった。小規模校においてよく言われる、一人ひとりに丁寧に関わり、各自に応じた学習を進められるというメリットがある反面、授業中の話し合いや、同級生の意見を聞けないことが課題であった。これらは、小野（2022）の「極小規模校が一般的に抱える課題」にあてはまる。これらの課題を解決し、多様な意見に触れ、主体的、対話的で深い学びを実現していくためには、教室を超えて協働する学びが大変有効である。山口（2018）も、「遠隔授業は、『学習意欲の向上』『多様な考えにふれる』『新たな人間関係構築』『コミュニケーション能力の育成』などの有用性を発揮し、離島小規模校の課題を解決する。」と述べており、小規模校である梁瀬小学校においても課題解決に有効な手段であると考えられる。

このことから、令和4年度は少人数の良さを生かした個別最適な学びへの取組は継続しながら、積極的に対外的な交流機会を作り、協働する学びを実践して取組を進めた。

具体的には、校内においては、以前より取り組んでいる、全校活動や同敷地内にある花園幼稚園の園児と一緒に活動する機会を多く設定して多様な考えを交流できるようにし、対外的には、同じ中学校区の小学校3校での交流、近隣校である高野町立花坂小学校と全校ぐるみでのオンラインと直接の両方の交流、また、1・2年生は前年度つながりのできた古座川町立明神小学校とオンラインでの交流を行った。

これらの取組を通じて得られた、小規模校における一般的な課題に関する取組の成果及び今後に向けての課題をまとめた。

2. 和歌山県内の小規模校の現状と梁瀬小学校の現状

令和4年度のかつらぎ町立梁瀬小学校は、前述の通り極めて小規模の学校である。ちなみに、令和5年度は1年生1名、2年生1名、3年生1名の全校3名、1・2年生複式学級と3年生1名のみ単式学級の2学級と、さらに規模が小さくなっている。

学校教育法施行規則¹⁾で標準としている12学級以上18学級以下の学校規模を適正規模とする場合、和歌山県では、令和4年度の時点で、この適正規模に該当する学校が小学校で25.43%、中学校で15.93%と少なく、適正規模に及ばない、いわゆる小規模校の割合が

高い。加えて、少なくとも複式もしくは児童の在籍がない学年のある学校（小学校5学級以下、中学校2学級以下）の割合が小学校で28.45%、中学校で7.08%に及び、さらに、児童生徒が1名のみ（校内に同級生がいない状況）という学年を含む、極小規模の学校は小学校で12.93%、中学校で5.31%も存在する（以下、極小規模校と呼ぶ）。

表1：和歌山県内小学校・中学校の小規模化の現状
(令和4年度和歌山県連合小学校長会、和歌山県中学校長会調査より集計)

小学校 (単位：校)				
地方	学校数	12学級以上	5学級以下	学年1名を含む
伊都	24	5	7	4
那賀	21	11	3	1
和歌山市	51	29	4	0
海草	15	3	2	2
有田	24	1	8	4
日高	31	2	10	5
西牟婁	41	5	18	10
東牟婁	25	3	14	4
計	232	59	66	30
割合		25.43%	28.45%	12.93%

中学校 (単位：校)				
地方	学校数	12学級以上	2学級以下	学年1名を含む
伊都	10	0	0	1
那賀	9	4	2	1
和歌山市	19	12	0	0
海草	9	0	0	0
有田	10	1	1	0
日高	19	0	1	0
西牟婁	20	1	3	2
東牟婁	17	0	1	2
計	113	18	8	6
割合		15.93%	7.08%	5.31%

学級数には特別支援学級を含めない
学級数は和歌山県の学級編成基準に基づく学級数及び学校独自編成を含めた実学級数
特別支援学校、和歌山大学教育学部附属学校・私立学校を含めない
分校は1校として数えた

特に、極小規模校においては、複式学級編成の授業で、間接指導の時間に同級生と話したり、共同で作業を行ったりすることができず、一人で学習することになる。また、休憩時間や放課後、自宅においても、たくさんの人とコミュニケーションをとる機会が少ない。小学校6年間をこの状況で過ごした児童が、中学校に進学すると50名以上の学年に入ることから、たくさんの生徒の中で同級生としっかりコミュニケーションをとっていきけるかという不安があり、学校、保護者はもちろん、学校運営協議会でも同様の意見が出るなど、地域の人々も課題と捉えていた。これらは、へき地・小規模校が抱える一般的な課題であり、本校においても当てはまる（表2）。

これらの状況から、梁瀬小学校では、小野（2022）の指摘をもとに、コミュニケーションの機会確保を第一の課題と設定し、コミュニケーションできる機会を積極的に作り、協働する学びを実践していきけるよう、

令和4年度の取組を計画・実施した。（図1）。

以下の章ではこれらの取組の評価について検討していく。

表2：へき地・小規模校が抱える一般的課題（小野（2022）²⁾）

1. 児童生徒数が少ないことによる課題
 - ・多様な意見に触れる機会が少ない
 - ・コミュニケーション力を育成する機会が少ない
 - ・社会性を養う機会が少ない
 - ・学習活動規模が小さい
 - ・他環境とのギャップ
2. 教員数が少ないことによる課題
 - ・教員同士の相談・研究・協力が行いにくい
 - ・専門性を活かした授業が困難
3. 山間部や離島など交通の便が悪いことによる課題
 - ・学校外の学習施設を利用しにくい
4. 複式指導に関する課題
 - ・児童生徒を直接指導する時間が限られる

かつらぎ町立梁瀬小学校

少人数の良さを生かした個別最適化学びに取り組みます

- 一人ひとりに丁寧にわかる教育を実践します。
- 一人ひとりの課題に応じた教育を実践します。
- 複式・少人数での個別指導の中で、GIGA端末やデジタル教科書を活用した取組を推進します。

(保護者・地域)
「少人数のため、多様な思いや考えに触れる、集団での活動を体験する機会が少ないのではないかと、」
「進学した際、いきなり多数の集団に入っても大丈夫か。」

協働する学びを実践するため、積極的にコミュニケーションする機会をつくり、取り組みます

- 勉強会を含め、全校で取り組む活動を実施し、異学年や異組での取組を実施し、多様な思い、考えに触れる交流を行い、積極的にコミュニケーションのできる児童を育成します。
- 担任以外の教員による授業も行い、様々な指導に触れる機会を作ります。
- ICTを活用したオンライン交流や、他校と合同で学ぶ機会をつくるなど、協働的な学習を実践し、積極的にコミュニケーションをはかる児童を育成します。

(R4)

朝のスピーチ（コミュニケーション力の育成）
読書活動の推進（図書館活用）
花園笑顔運動（JA・社会福祉協議会へプランター）
授業（12年生 書写・生活科 56年生 書写・音楽 6年生 T、
梁瀬小学校同士の交流（花塚小学校・明神小学校など、他地域の学校）

- ・花塚小との交流
- ・オンライン自己紹介
- ・オンラインで朝のスピーチを交流
- ・合同で一輪車教室
- ・学習発表会の一部をオンライン中継して交流
- ・広範囲での交流（花塚小・明神小）
- ・生活科や総合的な学習など、教科・時間における意見交換などをオンラインで行う交流学習を行う

☆ 同じ中学校区の小学校と共同で学ぶ（相手校へ・相手校から）

○ かつらぎ町立梁瀬小学校プロジェクト
総合的な学習・特別活動
各学区にある、かつらぎの史跡、名所等と同じ中学校区の6年生が集まり、現地で学習をするときに、交流を行う。
事前 事後のやりとりを、テレビ会議やデータ共有など、ICT機器を活用してオンラインで行う。
歴史を学ぶ→かつらぎの史跡などで直接 オフライン 同じ中学校区の6年生
現校を学ぶ→学びの中から、今のかつらぎについて知る。
未来を学ぶ→学びをまとめていく過程でかつらぎの将来について考える

図1：令和4年度 梁瀬小学校の取組について
(PTA 総会 及び 学校運営協議会説明資料)

3. 校内における協働する学びの実践

3.1. 朝のスピーチ

梁瀬小学校では、コミュニケーションの力を養う課題への取組の一つとして、令和3年度から、全校で「朝

のスピーチ」を行っており、令和4年度もこの取組を継続して実施した。

この取組を継続することにより、児童は自分の考えや、思っていることを多くの人前で話すことに自信を持ち、また、わかりやすく伝えるための工夫ができるようになった。

3.1.1. 朝のスピーチの内容

このスピーチは朝の時間を使って、毎日一人ずつスピーチを行う。月曜日は全校集会を行うので、火曜日から金曜日にかけて6年生から順番に一人ずつ、行事等がある場合には、一日二人がスピーチをするなど工夫をして、どの児童も週1回、順番が回ってくるようにした。スピーチのテーマについては、前の週のうちに当番の教員が告知し、各自準備しておくようにした。児童が話すことに困るような時には、準備を担任教員が支援した。

スピーチはランチルームで行い、児童と教職員が出席し、スピーチの後、質問、感想、意見を述べる。

テーマについては、「春になったなと感じたこと」などの季節に合わせた内容や、「おすすめの本を紹介してください」と、自分の読んだ本の面白いところやみんなに知ってもらいたいところを説明する内容、「あなたが考える『夢の時間割』を教えてください」など、多岐に渡る。教職員も、児童の考え、思いが表現できるように工夫し、「何を話したらいいかわからない」とならないようにしている。

児童も事前に設定されたテーマに基づいて工夫し、1、2分程度にまとめて、全校児童の前でしっかりと話せるようになってきている。

3.1.2. 朝のスピーチの成果

スピーチは毎週、6年生から順番に行っている。6年生は、ミニホワイトボードに箇条書きにまとめて示しながら話をしたり、おすすめの本の場合には、紹介したい内容や絵図、写真が載っているページに付箋を貼っておいて、話の途中で開いてみんなに見せたり、時には他の児童に問いかけたり、二択、三択の設問を準備して聞き手に解答させたり、事前に自分で話すことを考えて箇条書きのメモを作っておいて発表したりする工夫が見られ、下級生にとって発表のモデルになっていた。

下級生は、6年生のスピーチを見て、その方法を自分のスピーチにも取り入れ、工夫して発表することができていた。

1・2年生も、原稿やメモを読むのではなく、自分の考えてきたことを自分の言葉で発表している。また、発表する内容がよく伝わるように、「今日は〇〇について発表します。初めに……。次に……。」や、「3つお話しします。一つ目は……。二つ目は……。」

といった、発表の仕方がきちんとできている児童もあり、発表の後に全体場で教員が評価して伝えると、以後の発表でその形を取り入れる児童が増え、さらに、スピーチの後、質問や感想を述べあう場面で、素朴な質問もでき、また、聞いた話に対して、自分もそう思う、自分だったらこうするなど、自身の立場についても述べることができるようになってきた。教職員からも、テーマに合わせた問いかけや、発表の仕方で良かったところや、工夫していったら良くなる点のアドバイスなども伝えるようにしている。

児童は、しっかりとした声で、姿勢もよく、聞く人のことを考えた話し方、資料の示し方ができるようになってきている（図2）。

これらの状況から、朝のスピーチは縦割り（全校）で協働することができ、コミュニケーションの力も向上したといえる。

これらの成果は、学校間交流において、発表や話し合いなどで、自分の考えや思いを伝える際に役に立っている。



図2：朝のスピーチ（左：6年生、右：2年生）

3.2. 異学年で協働する学び

前述の通り、梁瀬小学校は、授業の際、教室に同級生児童がいない、という状況になることから、他の児童の意見を聞いたり、複数名で活動したりする際には、必然的に他の学年の児童と関わることとなる。

体育、音楽、総合的な学習や生活科などは、それぞれの学年の目標、内容に取り組みながら、一緒にできる部分については一緒に授業や活動を実施してきた。

児童は、これらの活動が日常的に行われることから、全校で一緒に活動することに対しては、学校生活の一部として抵抗なく取り組むことができていた。

朝のスピーチだけでなく、学校行事、登下校も含めて、たくさんの場面で一緒に活動することから、お互いを思いやることのできる状況である。

3.2.1. 複式学級における協働的な学び

複式学級では、通常の時間割においても隣の学年と、

1人の学級である6年生、特別支援学級の児童も、頻繁に隣のクラスと一緒に活動することとなる。また、音楽の時間の合唱や生活科のカルトとりなど、一定の人数が必要な場面においては、校長をはじめ校務員も含めた全教職員が参加し、一緒になって活動する場合もある。

授業の中でも、従前から同じ教室にいる隣の学年の児童に意見を聞いてみたり、先生が児童と同じ立場で意見を述べ、話し合ったりして、協働する場面を作ってきた。また、前年度までの授業記録を蓄積し、「去年は、こんな意見もあったよ。」などと、昨年度までの児童と間接的に協働する場面も作っている。この場合も、その教室にはいないが、実在する先輩や卒業生などの具体的な意見として示すことができるため、児童にとっては「〇〇さんの意見」、すなわち本物の意見として捉えることができる。

本来、これらの活動のほとんどが多人数の学級であれば学級内で取り組むことができ、完結できる内容であると考えられる。しかし、同級生がいない、全校児童数4名という梁瀬小学校の現状の中、少しでも多くの児童と一緒に活動する、また、異学年の子ども達と一緒に活動する、ということを目指し、できる工夫を実践してきた、という現状である。

これらは、朝のスピーチも含め、以前よりコミュニケーションの力をつけるための取組として継続してきていることであり、教室での学習はもちろん、他校との交流においても有効に働いている。令和5年度も、学校がさらに小規模化している中、継続して取り組んでいる内容である。

3.2.2. 学校行事における協働的な学び

グリーンカーテンの苗植え、遠足、ぶどう狩り体験などの体験活動、プール掃除、学習発表会、花の苗の植替、運動会、夏休み、冬休み期間のオンライン朝の会などの学校行事、活動は、全校で行なっている。

これも異学年交流と同じく、高学年児童が手本となり、低学年児童に指導やアドバイスをを行っている。低学年児童は、高学年児童を見て学び、自分が高学年になったらこうする、と将来に向けて目標を持つことができている。

特に、運動会などは、1年生から開会式の役割分担を持ち、学校の一員として、大事なメンバーとして活躍するという経験を通じて、団体活動における役割分担と協力の大切さを学んでいる。

3.2.3. 幼稚園との協働的な学び

同じ敷地にある花園幼稚園(園長は小学校長が兼務、令和4年度の園児は年長1名、年中2名の計3名)では、夏まつりごっこ、秋まつりごっこ、ハロウィンパーティ、クリスマスパーティといった行事があるごとに、

小学生を招待し、一緒に行事を行っている。

児童はゲスト参加し、お客さんになったり、幼稚園児と役割を交替したりしながら活動した。この際にも、教職員が一緒に入って活動をしている。

活動を通じて、小さい子供達への思いやりが醸成され、少しでも多い人数で活動することが、幼稚園児、小学校児童の両方が協働する学びに繋がっている。

ちなみに、令和4年度、花園幼稚園においても多様な関わりができるよう交流を行っており、同じ町内の三谷こども園を7月に訪問して交流し、10月には三谷こども園の園児が花園地区に遠足に来て、花園幼稚園の園児と交流をした。また、地域のイベントに出演してダンスを披露したりするなど、たくさんの人々と関わる機会を積極的に作るようにしている。

これらの経験で培ったコミュニケーションの力が、小学生になった際に生かされている。

3.3. 学校内における協働的な学びの限界

このように、異学年、時には教職員も入って、意図的に協働する場面を設定し取り組んできた。しかし、令和4年度の小学校・幼稚園においては、児童4名と、幼稚園児3名、校務員、幼稚園教員も含めた全教職員が9名しかおらず、多様な意見の交流、多人数での団体行動などには限界がある。特に同じ学年の児童と関わるできないため、これを行うためには、他校と関わる機会を設定する必要がある。

この限界に対応するため、令和4年度は、これまで実施してきた、町教育委員会主催の行事などに積極的に参加して他校児童と触れ合う機会を確保する取組を継続することに加えて、通信環境、機器整備が進んできたICTを活用した他校とのオンライン交流や直接交流などを積極的に行うことで、教室を超えて協働する学びを行っていきたいと考え、積極的に機会を設定した。

4. 学校間交流を通じて協働する学びの実践

4.1. 高野町立花坂小学校との定期的な交流

令和3年度は花坂小学校4年生、梁瀬小学校3年生、明神小学校4年生が、気温調べを中心に、オンラインで交流を行っていた。そのため、花坂小学校とは繋がりができており、令和4年度は、朝のスピーチ、生活科の授業、学習発表会の中継、直接交流と定期的な交流を実施した。

4.1.1. オンライン朝のスピーチ

花坂小学校は梁瀬小学校と同様に、朝の会の時間に日直がスピーチを行っていたことから、よりたくさんの子どもの前でスピーチできる機会として、令和4年度

はオンラインでスピーチ交流をしないかという提案を梁瀬小学校から申し出たところ快諾いただき、朝のオンラインスピーチが実現した。

ほぼ毎月、両校からのスピーチを1回ずつ設定し、スピーチを聞いた後で両校児童から感想や質問、意見を出し合うようにした(図3)。

両校とも6年生から順にスピーチしていくことで、オンラインでの話し方の工夫(ゆっくり、大きな声で話す、図や絵があれば示す、写真があれば画面共有で示す、など)のモデルとなり、低学年の児童が学ぶことができた。また、お互いに感想や質問、意見を出し合うことができた。たとえば、運動会の時期には、それぞれの学校の練習の進み具合や自分が頑張りたいことなどを話し、遠足に行ってきたことを話した児童に対しては、自校の遠足の様子を話して交流するなど、お互いの学校の様子を知ることができた。



図3：オンライン朝の会の様子(スクリーンは花坂小学校児童のスピーチ)

4.1.2. 1・2年生生活科の交流

6月14日に、1・2年生がオンラインで生活科の授業内で交流を行った。内容は、それぞれの学校の生活科で行った「がっこうたんけん」の報告であった。児童は、担任の補助を受けながら、自分の端末で撮影した写真を画面共有して提示し、学校の様子を説明した。

スピーチ交流でつながりができているため、緊張せず、お互いの学校の様子を報告し合い、共有することができた。

4.1.3. 学習発表会でオンラインライブ中継

11月26日に両校が学習発表会を実施した。同じ時間帯の実施であることから、発表会の途中にテレビ会議で接続し、お互いの村の歌や太鼓の発表をライブ中継し、交流をした(図4)。

梁瀬小学校からは花園村の歌である「ホテルブクロ咲く村」「村はうのはな」の合唱を、花坂小学校からは、10月の上遷宮で奉納した「鬼もみ太鼓ジュニア」

の太鼓演奏を、各校からの説明のあと披露をした。両校とも地域の方々が観覧されており、自校だけでなく、相手校の地域の方々にも聞いていただくことができた。さらに、児童同士だけでなく、自校と相手校、両校の司会児童がそれぞれの観覧者にインタビューし、双方の観覧者から感想を聞くことができた。お互いの地域のことを理解する機会になった。



図4：学習発表会でのオンラインライブ中継の様子

4.1.4. 直接交流の実施

6月22日にはベルマーク財団の一輪車教室を合同で開催し、梁瀬小学校児童が花坂小学校に行き、元世界チャンピオンと、現在国内トップクラスの一輪車選手の指導を受けた。

2月2日には、花坂小学校児童が梁瀬小学校に来校し、交流した。学校案内の後、6年生が花園地区の紹介プレゼンをし、ドローン操縦体験をした。

2月7日には、梁瀬小学校児童が花坂小学校に行き、花坂名物のやきもちづくりを、やきもち店から指導に来ていただいて体験した。

両校児童とも、オンラインの交流もしていることから、スムーズに活動することができた。活動の規模が大きくなり、自分達だけの学びから、他校と一緒に学ぶ学びへと、幅を広げることができた。

4.2. 古座川町立明神小学校との1・2年生生活科での協働する学び

古座川町立明神小学校も、令和3年度に気温調べで交流していた関係でつながりがあり、直線距離でも100キロメートル近く離れていることから、特に季節に関する内容で違いが見られ、お互いの地域の様子を知ることが期待できる交流校である。

7月14日に、古座川町立明神小学校1・2年生とオンライン接続し、お互いの学校の様子を交流した。児童が撮影した学校の写真を画面共有しながら、児童が説明をした。どちらも小規模校で、一輪車に取り組んでいるなど共通点も多く、両校とも積極的に発言をし

た。特に一輪車については、1年生がまだ自分一人では乗れない状況であったことを話すと、明神小学校児童から、つままりながら乗る練習をしたら良いなど、たくさんのアドバイスをもらった。

11月15日には「あきのようす」を交流した。梁瀬小学校から、紅葉が進んでいる状況を説明した後、児童が端末を持って運動場に行き、目の前で黄色に染まったイチョウの葉が散る様子の中継した。明神小学校からは、近くのイチョウの葉はまだ青いという報告があり、地域によって気候が随分違うということを両校の児童が学ぶことができた。

また、1月26日には、前日降った大雪で運動場の積雪が40センチメートルに達していたことから、急遽連絡を取り合い、オンライン接続をした。積雪の状況を教室で説明した後、運動場に端末を持って行き、1・2年生児童がライブで積雪の様子の中継した(図5)。お互いの地域の積雪状況を知り、ここでも離れた地域の気候の違いを知ることができた。

特に梁瀬小学校1・2年生は、自校の様子を発信し、話し合う機会を得られ、両校児童が協働する学びを行うことができた。



図5：積雪の様子をテレビ会議でライブ中継している様子

4.3. 同じ中学校区であるかつらぎ町立笠田小学校、渋田小学校との6年生同士の交流

梁瀬小学校は以前、同じ中学校区である隣接校の渋田小学校と交流する機会があったが、コロナ禍で交流する機会がなくなっていた。

また、同じ中学校区には、笠田小学校もあり、梁瀬、渋田、笠田の3校小学校の児童は中学校で一緒に学ぶことになるが、これまで3校が一緒に交流し学習する機会はなかった。

令和4年度、梁瀬小学校で広くコミュニケーションできる機会を作っていく方針を立てていたところ、和歌山県教育委員会の補助事業「わかやまスクールパワーアップ事業」の募集があり、これを活用して同じ

中学校区になる笠田小学校、渋田小学校との交流学習「かつらぎ探検隊協働学習プロジェクト」を企画して応募したところ、事業が採択され、交流学習を軸とした協働学習を行うことができた。

4.3.1. 交流学習の実施

7月から、オンライン等を活用した打ち合わせを行い、準備を進めた。

11月29日に、花園地区へ3校の6年生児童が集まり、梁瀬小学校、花園地区の様子を直接見る機会を作った。梁瀬小学校児童の案内で学校全体を見て回ったのちに、梁瀬小学校児童が花園地区の紹介、高齢者の買い物調べのプレゼンを行なって花園地区の様子を説明し、学習の中で調べたドローンで、操縦及びプログラミングの飛行実演をした(図6)。



図6：ドローンをプログラム飛行させている様子

2校の児童は、同じ町内でも遠いところ(両校から23から26キロメートル離れたところ)に梁瀬小学校があることやその地域の様子を知ることができ、梁瀬小学校の児童は、中学校で同級生になる予定の児童に自分達の地域の様子を伝えることができた。

12月16日には、梁瀬小学校児童が午前中に渋田小学校、午後笠田小学校を訪問し、それぞれの学校の6年生が、自分の学校、校区の様子を説明し、その後交流した。

2月9日には、梁瀬小学校児童が笠田小学校を訪問して、6年生の授業に参加し、給食、掃除も一緒に行なった。梁瀬小学校児童にとって、たくさんの児童との学校生活の体験はめったにないことであるが、翌年4月からは毎日がこの状況になるので、一緒に学ぶ予定の子達と一緒に過ごせたことは有効であった。

2月10日には、梁瀬小学校児童が渋田小学校を訪問し、両校6年生と一緒に、卒業式につけるコサージュに使う「さをり織り」をつくった。これは町内にある福祉事業所の方々が指導に来てくださり、各自の作品を福祉事業所でコサージュに加工し、卒業式の胸の花

にするという取組で、自分の織ったものが花になる経験と、福祉事業所について学ぶ機会になるものでもあった。

これらの直接交流に関わって、感想やお礼の手紙の交流や、オンライン（Teams）での書き込みなども行い、お互いの地域の共通点や違いについて知ることができた。また、これからのかつらぎ町をこんな町にしていきたい、という意見の交流もできた。

4.4. 交流学習の成果

交流の機会を多く設定することで、イベントとして一度出会って終わり、となるのではなく、次の機会にも自然と意見の交流ができた。このことは、話し合う相手が多くなることにつながり、多くの意見が欲しい場面で、協働する学びができることにつながる。

教室を超えて他校の児童と学べることで、多様な意見の交流ができ、自分だけでは思いつかなかった意見や気づきを知ることができたり、自分の考えと同じであることを共有できたりすることで、協働する学びへとつながる。

また、交流の場面を通じてコミュニケーションの力が向上した。校内における普段の取組の成果が発揮できる場となり、モチベーションをしっかりと持って取り組むことができ、伝える力が向上した。

花園での3校交流では、洪田小学校、笠田小学校の児童は、花園地区を初めて訪れたという児童も多く、手紙やオンラインでの、事後のやりとりでは、「同じかつらぎ町ですが、花園地区は自然が多く、随分様子が違うということがわかりました。」「梁瀬小学校のみんなは百段の階段を上っているのはすごいと思った。」という記載があった。

さらに、6年生の場合は翌年4月から一緒に学ぶことになる児童と継続的に交流し、知り合うことができたことにより、中学校生活について前向きに、また具体的に考えることができた。各校での発表や事後の手紙などで「中学校で一緒に学ぶことを楽しみにしています。」という書き込みをたくさん見ることができた。各校による自校区の発表においては、「農業はいつも自分の家で見ているつもりだったが、知らないこともたくさんあった。大変な仕事であるということがよくわかった。」と、改めて自分の校区について見直す児童がいた。交流学習を通じて他の校区の様子を知ることができ、同じ町内の地域による違いや共通点を知ることができ、多面的、多角的な視野で見ることができた。

また、今回は時間が足りず発展することができなかったが、「どの校区にもたくさん神社があると思った。」「これからのかつらぎ町がもっと住みやすい町になったらいいと思う。今以上にゴミとかがない町にしていきたい。」といったオンラインでの書き込みが見ら

れた。

5. 地域との協働

この数年、コロナ禍により、地域の方々との関わりが減ってきていたが、状況が徐々に改善されてきていることなどから、以前から地域の方々にお世話になっていた行事、学習活動が少しずつできるようになってきた。その中から主だった事例を挙げる。

10月9日の運動会では、雨天により、梁瀬小学校運動場から旧花園中学校体育館に変更することとなったが、地域の方々が準備、片付けを協力くださり、また、たくさん参加くださった。児童もたくさんの方々に演技を見ていただけたこと、種目によってはたくさんの方々と一緒に演技することができたことで達成感を得ることができた。また、運動会終了後、児童と園児で参加いただいた方々に記念品を渡してお礼を言い、たくさんの方々の関わりを持つことができた。

11月26日の学習発表会では、地域の方々、町教育長、町議会議員、学校運営協議会の委員の皆様と、たくさんの方々に参加いただいた。

先述の通り、花坂小学校とのオンライン中継での発表もあり、他地域の方々にも発表を見ていただくことができ、花園地区の様子を知ってもらうことができた。

12月1日の「花いっぱい運動」では、児童が花苗を配布する活動を実施した。社会福祉協議会に行き、デイサービス利用者の方々と交流し、花苗をお渡しした。この際、デイサービス利用者の皆さんから、活動で作ったわら草履を児童全員にいただいた。その後、役場花園支所前において、地域の方々を対象に花苗の配布を行った。寒い中であつたが、地域の方々がたくさん訪れ、軽トラックの荷台いっぱいに準備した花苗が、ほぼ全部配られた。

6月から10月の総合的な学習の時間では、6年生が、社会福祉協議会花園支所の利用者の方々、梁瀬地区の住民の方々に「高齢者の買い物調べ」のインタビューを行った。特に、梁瀬地区の住民の方々には、突然の訪問にもかかわらず、児童の質問に対し、丁寧に答えてくださり、協力いただいた。「梁瀬小学校6年生の〇〇です。」と挨拶すると、「〇〇さんの子供さんやね。大きくなったね。」というふうに、地域の方々にも覚えていただくことができた。この学習の調査結果は先に挙げた学習発表会において、地域の方々の前で発表した。

これらに加え、年間を通じて「田んぼの生き物（生活科、特別支援学級自立活動）」や「まちたんけん（生活科）」「梁瀬のようすを地図にあらわそう（社会科）」などでも、地域の方々は、いつも好意的に児童の学習に協力いただいている。

活動を通じて、児童は地域の人々との関わりの中で

コミュニケーションの力をつけることができ、また、教室や交流学习で身につけたコミュニケーションの力で地域の方々との関わりが充実するというスパイラルが形成されている。

山間へき地において貴重な存在である「むらの子」達の学びを、地域の方々が見守り、支えてくださっていることを、教職員だけでなく、児童も感じることができた。

6. 成果と課題

6.1. 小規模校の一般的な課題に対する成果について

令和4年度の梁瀬小学校は、積極的に他校と関わる機会を多く持つように進めていった結果、表2であげた課題点について改善されてきているといえる。

まず、多様な意見に触れる機会が少ないことについては、オンライン、直接交流を通じて、交流校児童の意見にも触れることができ、自校だけ、関係者数名の意見だけではなく、広く考えることができるようになった。

「コミュニケーション力を育成する機会」については、校内で継続して取り組んでいる朝のスピーチなどによってつけた力を、各授業や、交流の機会を通じて発揮することができ、相手を意識してコミュニケーションできることができた。この相互作用により、よりコミュニケーションの力を向上させることができた。

「社会性を養う機会が少ない」、「学習活動規模が小さい」、「他環境とのギャップ」という点については、特に6年生の交流で洪田小学校、笠田小学校に行った日に交流行事だけではなく、それぞれのクラスに入って通常の授業と一緒に参加したり、給食や掃除も含めた活動を一緒にしたりするなど、学級の一員として友達と一緒に活動しながら社会性を養う機会となり、一定の人数がいる学級に入ることによっていつもより大きな学習活動規模にも触れることができた。さらに顔見知りになったことで中学校進学時にいきなり50名以上の同級生の中に入ることに對する不安を減らすことにもつながった。

6.2. オンライン交流の簡易化と、一人一台端末の活用

令和4年度、梁瀬小学校の実践では、特に花坂小学校とのオンライン朝の会を継続的に行うことで、表現力も向上し、相手に向かってはっきり、ゆっくり話すよう心がけて発表するなど、工夫も見られるようになってきた。伝える相手があることで、写真やボードにまとめたものの提示など、伝えるための工夫がたくさん見られるようになり、コミュニケーションの力を向上させることができた。

従前からの教室での少人数での学びは継続するとと

もに、交流学习を加えることで学びの幅が広がり、多様な意見に触れることができた。

オンライン交流については、児童一人一台端末が整備されたことにより、簡単にテレビ会議を実施できることから、極小規模校の教育にとっては、いっきに学びの幅が広がったといえる。

テレビ会議について、令和4年度は長期休業中、定期的に「オンライン朝の会」として、児童が自宅からテレビ会議に接続し、教職員も参加し、顔を見て近況を話し合う取り組みを実施した。コロナ禍において、休校等になったり、数日間の自宅待機になったりした場合においてもオンラインでの授業対応が行えるようにするための練習としても有効であった。

6.3. 今後の課題

今回の実践を通じて課題として考えられることを挙げる。

第一に、交流相手をつくるのが課題である。丹間(2016)においても、「他校と多面的なネットワークを築くことは、限られた児童数の極小規模校を運営するうえで重要な基盤の一つ」であるとしており、学びを広げる手段として他校とネットワークを築くことは大変重要である。梁瀬小学校の場合、花坂小学校は校長の前任教であり、また、校長同士のつながりもあったこと、明神小学校も含めて、前年度から交流の実績があり、お互いのニーズをうまく繋げられたことにより、進めることができた。

梁瀬小学校と笠田小学校、洪田小学校との交流については、同じ中学校区であることから、梁瀬小学校の働きかけに応じてくれたこと、和歌山県教育委員会の補助事業に採択され、笠田小学校、洪田小学校両校の6年生が花園地区に集まることに関する交通費等の支援が得られ、交流ができたことが挙げられる。大きな事業を実施するにあたっては、補助事業の活用や、町教育委員会の支援を得るなど、工夫が必要になる。

第二に、年間計画との兼ね合いなどから、各校のニーズをつなぐことについても難しい面がある。笠田小学校、洪田小学校との交流の取組は、両校の協力があって実現したが、年度途中からのスタートになり、各校の年間計画が進行していく中での取組となったため、状況によっては今回のようにはいかない場合もありうる。

これらを考慮しながら、交流学习を進めていくためには、各校のめざす教育が実現できること、できれば同じ目標であれば一番良いが、同じ活動に取り組んでいく中で、各校の独自性も大事にしながらそれぞれの目標を達成していくという方法をとる場合も考えられる。活動することを目標とするのではなく、協働する学びを通じて目標を達成できるよう計画していかなければならない。

第三に、各校が繋がっていくためには、年間指導計画の中に、交流学习が協働する学びとして位置づけられるようなカリキュラムマネジメントが必要である。可能であれば前年度末から打ち合わせを実施するか、人事異動で担当者が変わることも想定されることから、遅くとも年度当初の計画段階には見通しを持った調整を進めていくことが必要である。

イベントとして盛り込むだけでなく、TV 会議や Teams の書き込みなど、オンラインでの交流を活用して日常的に協働できる素地を作っておくことで、発展的に協働する取組に移行できる可能性もある。

赤崎（2018）で紹介されている複式双方向型遠隔合同授業の形態などが日常的に行われ、協働する場面がたくさんみられる授業を展開できる環境が整ってきている。これらを生かした教育を展開できるよう、前述に述べた通り、交流する相手、すなわち協働する仲間をつくっておきたい。

第四に、多様な形態で、協働する学びが実現できるような工夫を考える必要がある。交流相手については、相手が同じような規模であるとは限らない。児童一人のクラスと児童 30 人のクラスが協働して学ぶような場合には、一人の児童は 30 人のクラスの中の 1 つのグループに参加するなど、さまざまな工夫が必要である。

第五に、教室を超えて他校と協働していく際には、その学習内容にあった形態をとり、その形態において考慮すべき点も含めて授業をデザインし、取り組む必要がある。中谷ら（2018）は、遠隔授業を「バーチャル見学型」「ゲストティーチャー型」「ワークショップ型」「合同授業型」の 4 つの形態に分類し、それぞれの形態について授業デザインの考慮点をあげている。このうち 6 年生の 3 校交流学习は「ワークショップ型」「合同授業型」の組み合わせ、花坂小学校との交流は、「ワークショップ型」にあたりと考えられる。また、1・2 年生生活科の交流については、「合同授業型」に近い。梁瀬小学校の課題解決に一番効果的であるのは「合同授業型」である。これを実現していくためには、これまであげた四つの課題を、学習内容に合わせてクリアしていく教職員のマネジメント力が必要である。また、「ワークショップ型」や「ゲストティーチャー型」も併用し、普段から交流しておくことで、「合同授業型」を実現し、有効なものにする素地にもなるといえる。

7. おわりに

成果と課題において挙げたとおり、他校との協働においては、各校の教育目標、取組の重点があり、お互いのニーズが満たされるよう、各校間の調整、また、各校におけるカリキュラム、マネジメントを行うことが重要である。これがなされず、交流のための交流と

なってしまった場合、各校にとっては負担となり、協働する学びに辿り着けないことになる。

各学級、各校でめざす学びをしっかりと持ちながら、お互いが生かしあえる関係になれるよう調整することが大切である。子ども達の学びが充実したものになるよう、これまでの取組での成果を生かし課題を超えていく工夫が必要である。

今後、教室を超えて協働する学びは、日常的、一般的に行われることが想定される。学びを広げたい時に、自校の教室だけでなく、交流校の児童の意見を聞いたり、自分の意見を聞いてもらったりしたいというふうに、交流学习を学びの選択肢に入れられるよう、計画的につながりをもっておくことも大事である。また、本研究のような教育実践を進めていける人材を育成することも大切である。和歌山大学では教員養成の段階において小規模校実習を行い、小規模校や複式学級を含む学校における教育実践に貢献できる人材の育成を図っており（宮橋ら 2022）、実習を経験した学生が教員として活躍することが期待される。

注

- 1) 学校教育法施行規則第 41 条で「小学校の学級数は 12 学級以上 18 学級以下を標準とする。ただし、地域の実態その他により特別の事情のあるときは、この限りではない。」としている。
- 2) 小野（2022）へき地・小規模校の特性を活かした学校間交流学习の意義－グローバルな発想が生み出す地域学習の有用性－、へき地教育研究 No.77、p.73-84、において、著者が『遠隔学習導入ガイドブック（平成 29 年度「人口減少社会における ICT の活用による教育の質の維持向上に係る実証事業」の成果を踏まえて）第 3 版』（2018）2-3 頁より抜粋編集し掲載したものを引用

参考資料・引用資料

- 令和 4 年度 和歌山県連合小学校長会名簿 和歌山県中学校長会名簿（2022）、p6-32、p.39-50
- 小野豪大（2022）、へき地・小規模校の特性を活かした学校間交流学习の意義－グローバルな発想が生み出す地域学習の有用性－、へき地教育研究 No.77、p.73-84
- 丹間康仁（2016）地域づくりを視野に入れた極小規模校の経営と学校統廃合、日本教育経営学会紀要第 58 号、p.101-107
- 赤崎公彦（2018）、小規模校同士の遠隔合同授業による複式指導の充実、日本教育工学会研究発表論文、https://www.jaet.jp/repository/ronbun/JAET2018_E-3-10.pdf（参照日 2023.6.1）
- 中谷瞳、山本訓子、山本伸二（2018）遠隔授業の 4 つの形態とその授業デザイン、日本教育工学会研究発表論文、https://www.jaet.jp/repository/ronbun/JAET2018_D-2-9.pdf（参照日 2023.6.1）

- 山口小百合 (2018) 小規模校の学びの質を向上させる遠隔授業の授業デザインの一考察、日本教育工学会研究発表論文、https://www.jaet.jp/repository/ronbun/JAET2018_D-2-8.pdf (参照日 2023.6.1)
- 宮橋小百合・豊田充崇・中田善夫 (2022) 教職大学院実習科目「小規模校実習」の成果と課題、和歌山大学教職大学院紀要 学校教育実践研究 No.7、p.11-18
- 文部科学省 (2021) 遠隔教育システム活用ガイドブック (令和2年度遠隔教育システムの効果的な活用に関する実証) 第3版
- 文部科学省 (2018) 遠隔学習導入ガイドブック (平成29年度「人口減少社会におけるICTの活用による教育の質の維持向上に係る実証事業」の成果を踏まえて) 第3版
- 広瀬一弥・中川一史 (2017)、小規模校・小規模学級における遠隔共同学習の考察、日本デジタル教科書学会発表予稿集 Vol.6、p.79-80
- 高橋望・加藤崇英 (2015)、へき地小規模校における学校経営とカリキュラム開発に関する研究動向、日本教育経営学会紀要第57号、p.242-252
- 前田賢次 (2021)、へき地複式校間のICT活用による双方向遠隔授業の成果と課題－徳之島町の5つの学校の取り組み事例から－、へき地教育研究 No.76、p.1-10
- 文部科学省 (2022)、令和3年度学校規模の適正化及び少子化に対応した学校教育の充実策に関する実態調査、https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tekisei/1413885_00003.htm (参照日 2023.5.10)